

リース航空機に500億円

三井住友系、中型60機購入

三井住友フィナンシャルグループ（FG）が出資する航空機リース（3）は、中型旅客機を60機取得する。購入総額は500億円超とみられる。新型コロナウイルス禍で落ち込んだ世界の旅客需要は、来年にかけてコロナ前

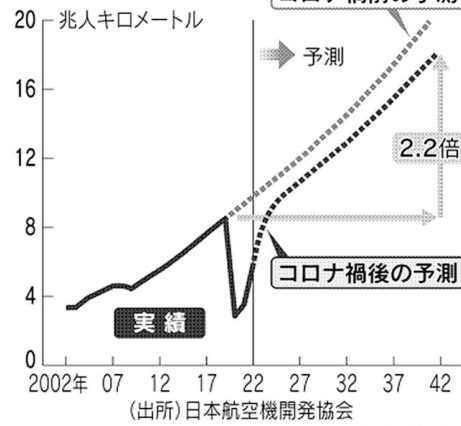
を上回る見通しだ。今後、市場拡大が続くとみて、大型投資に踏み切る。SMBACAは三井住友フィナンシャル&リース（FL）と三井住友銀行が出資している。エアバス製の最新中型機「A320neo」を購入する契約をこのほど結んだ。燃費性能が高く、温暖化ガス排出量を減らしたい航空会社からの需要を見込む。市場流通価格から換算した5000

億円の購入資金は、銀行借り入れや社債発行でまかなう。A320neoは機内の通路が1本のナローボディと呼ばれる機体だ。主に国内線を飛び、世界に流通する機体の7割弱を占める。市場平均のリース料は月間28万5380円（約4200万円）前後とみられる。利用する航空会社が多いため売却時に買い手がつきやすく、資産としての流動性が高い。SMBACAは今年9月、ボーイング製の中型機も25機発注した。総額は市場価格換算で2000億円規模。エアバスを含めると新規の発注は85機になる。SMBACAは足元で496機を保有している。すでに発注済みの機体や補修のみを請け負う管理機体などを合わせると同社が扱う機体数は約1000機となる。

航空機リース

利用拡大、世界の47%

コロナ禍で打撃を受けた航空旅客需要は回復が鮮明



きょうの注目

の経営が悪化し、リース料の支払い延滞や新規のリース契約が取れない事態が相次いだ。ロシアによるウクライナ侵攻ではロシア国内の航空機の回収が困難になり、世界のリース会社が減損を計上する事態となった。

▽：航空機を購入し航空会社に貸し出すビジネス。高額な航空機を自前で保有するより、需要の増減にあわせて契約できるため航空会社の利用が増えている。とくに近年台頭する格安航空会社(LCC)のリース利用率が急速に高まっている。足元では世界を飛び回る航空機の47%がリース会社の保有とされる。

▽：長期的に見込める成長を取り込もうと航空機リース業界では再

▽：不測の事態で打撃を受けること

編が相次いでいる。SMBCAピエール・エーシオンキャピタルは2022年にアイルランドに本社を置くコスホークを約2000億円で購入。21年には当時2位だったエアキャップ(アイルランド)が1位だった米ゼネラル・エレクトリック(GE)の航空機リース部門GEASを買収し、機体数が2000機超のガリバーが誕生した。